

—熊本県の縄文時代カメ棺—

隈 昭 志



第1図 熊本県下のカメ棺出土状況

(I) はじめに

縄文時代の埋葬については轟貝塚（宇土市宮庄）をはじめとする貝塚から人骨が検出されて、かなりはっきりした状態で確認されている。しかしカメ棺葬については出土例が少なく、また報告された例もあまり多くない。したがって、熊本県下の事例について、系統的あるいは地域的にその特色を把握することはかなり困難である。

本稿では筆者が関係した調査事例のうち、おもなものについて述べてみたい。

なお、本稿を書くにあたっては、熊本県文化課の上野辰男、緒方勉、高木正文、江本直の各氏から御教示・御援助をうけた。ここに記して深謝の意を表したい。

(II) カメ棺の概略

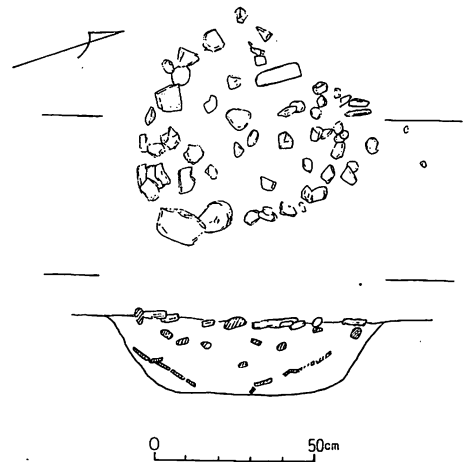
現在、熊本県において、縄文時代のカメ棺出土地あるいは参考地としてあげられる遺跡は第一表のとおりである。

全国的にみても、縄文時代の中期以前のカメ棺は少く、後期・晩期になれば事例は多い。熊本県における中期以前とみられる例は成竹遺跡と諏訪原遺跡である。

成竹遺跡は山鹿市の東方に広がる標高40～100 m前後の洪積台地上にある。昭和43年～44年にかけて大規模な開田事業が行われた際に、押型文・北久根山式・三万田式の縄文土器片や野辺田式土器片が採集されたほか、奈良時代の竪穴式住居址等が検出されたところで、北久根山式に伴うとみられる蛇頭型土製品もここから採集した⁽¹⁾。

昭和44年1月15日、開田事業によって遺物がみつかったというので、調査を実施したところ、奈良時代の住居址に隣接して礫の集積した地点がみつかった。夕刻近くになってからの確認であるため、写真も撮れず、手さぐり状態の略測しかできなかったのが、今にしてみれば残念でならない。出土の状態は第1図のとおりである。約50個の礫群を除去していくうちに、下にカメ形土器のある

ことがわかった。厚手の軟弱な胎土の土器をほぼ直立に立て、その周囲と上部に礫を置いたものと推定できる。器面は押型の原体を回転させずに調整したものとみられ、器形はまだ復原できていないのはっきりしないが、口縁が直立してやや内彎しながら底部にいたる尖底または丸底の土器とみられる。口縁の直径50~60cm、高さ約40cmの深鉢形土器である。ただこの深鉢形土器がはたしてカメ棺であるかどうか問題であるが、土壌に直立して立て、周囲や上部に礫を並べた状態、また周辺は焼けていない点などからすると、埋葬遺構か貯蔵用の遺構のいずれかであろう。最近熊本県下で、押型文に伴なって礫を集めた集石遺構が検出されているが、直立しておかれたようなカメ形土器は検出されていない⁽²⁾。



第2図 成竹のカメ形土器出土状況

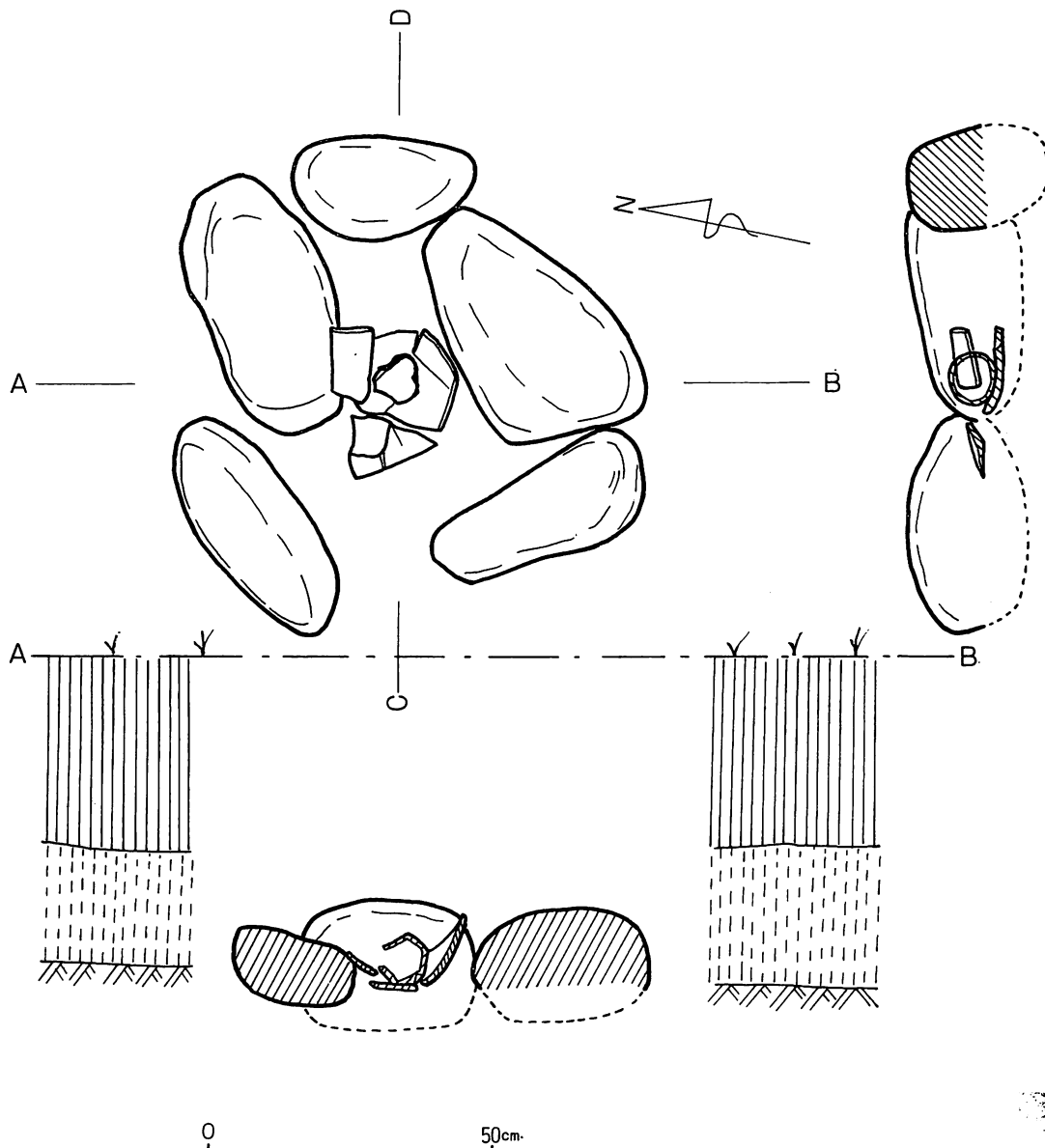
諏訪原遺跡は菊池川下流の左岸の標高約40mの洪積台地上にある広大な遺跡である。九州縦貫建設に伴って県教育委員会が昭和44~45年にかけて調査したもので、弥生後期の住居址群を主体とした遺跡であるが、その中の縄文時代の焼けた土壌（第7号土壌）内に燃糸文の円筒形土器を置い

第一表 縄文時代のカメ棺出土地あるいは参考地

	遺跡名	所在地	時期	調査者 報告者	備考、文献など
1	成竹	鹿本郡鹿本町成竹	早・前期?	限	
2	諏訪原	玉名郡菊水町諏訪原	同	緒方勉	1.
3	三万田	菊池郡洒水町三万田東原	三万田	同上	2.
4	向原	鹿本郡鹿央町向原	御領	限	
5	清原	玉名郡菊水町江田清原	同	高木正文	考古学論叢2号 高木報告
6	轟貝塚	宇土市轟宮庄	同	松本雅明	3.
7	御領貝塚	下益城郡城南町御領	同	小林久雄	4.5.
8	布田	阿蘇郡西原村布田東原	同	乙益重隆	6.
9	上の原	熊本市健軍町上の原	同	富田紘一	7.
10	竹後	同 竜田町竹後	同	松本雅明 ほか	8.
11	竜田陣内	同 竜田町陣内	同	上野辰男	
12	新南部A	同 新南部町	同	上野辰男	9.
13	沖の原	天草郡五和町二江	同	内藤芳篤 坂田邦洋 隈	10.
14	西原	山鹿市鍋田西原	黒川	杉村彰一	11.12.
15	泉ガ丘	熊本市健軍町泉ガ丘	山ノ寺	平岡勝昭	13.
16	水の山	菊池郡大津町矢護川	同	限	14.

た状態で検出され、調査者の緒方勉氏は埋葬遺構であろうとしている。

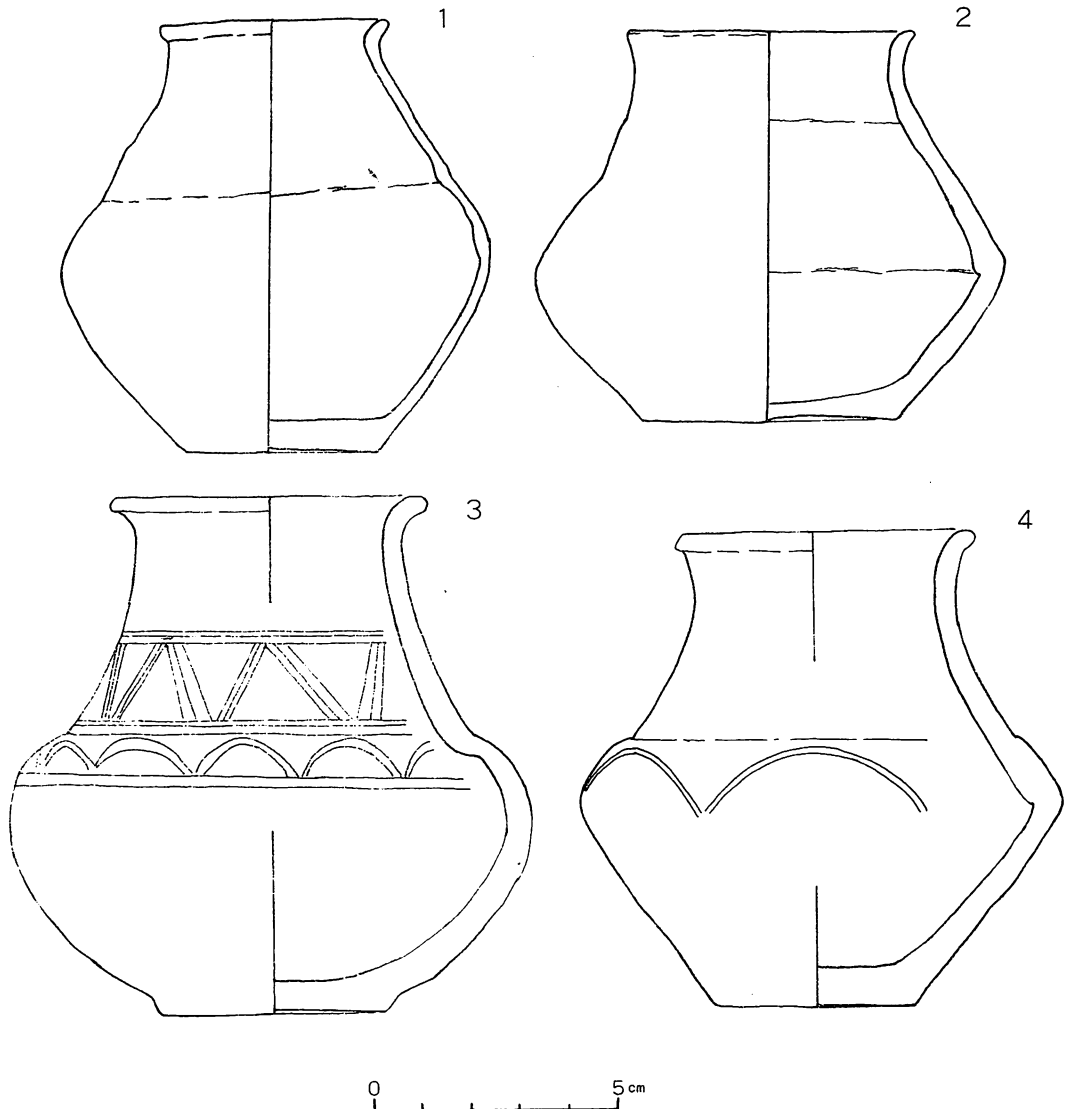
中期とみられるカメ棺の出土例は今のところないが、御領式土器の時期になるとかなりの出土例がある。直立した単棺の中に小児人骨が納められていた轟貝塚、御領貝塚（下益城郡城南町）、粗製の大型カメを直立に埋め、浅鉢を蓋として使用した布田遺跡（阿蘇郡西原村）など代表的なものである。この時期のカメ棺はほとんど磨研されたカメ形土器を使用し、しかも直立に埋めているのが特徴である。またなかには浅鉢を蓋がわりに使用している例がみられることから、いわゆる合口カメ棺の先行形式ともいうべきものであろうか。



第3図 水ノ山の配石遺構

黒川式・山の寺式の時期以降になると単棺のほかに同形式のカメ形土器を合わせた埋葬方法も行なわれるようになる。

西原遺跡（山鹿市鍋田）は昭和42年11月開田事業によって発見されたものである。鍋田横穴群（国指定史跡）の西方約1.5 Kmの菊池川右岸の洪積台地（標高80m）上にある。カメ棺は三基を確認したが、いずれも粗製のカメ形で、最大径の肩部で「く」の字に内彎し、口縁部に刻み目を施している。上部がブルドーザーによって削平されているため詳細は分らないが、1号は直立の合口で下カメは底部を欠いている。上・下カメとも同形式である。2号、3号は合口か単棺かは不明で2号は直立しており、1号同様に底部を欠く。3号は押しつぶされた細片であったので埋葬状態が分ら



第4図 水ノ山八反田出土土器実測図 1.2.水ノ山
3.4.八反田（緒方勉氏原図）

ないが、底部は円盤はりつけである。1号、2号は埋葬時すでに底部を欠くカメであり、意識的に欠いたものか、あるいは底部の欠損したカメ型土器を転用したのかは分らない。なお、カメ棺の周辺からは完形に復原できる黒色磨研された鉢型土器を検出したが、カメ棺とはほぼ同時期のものと考えられる。

阿蘇外輪の鞍岳山麓（標高230 m）の水の山遺跡⁽³⁾（菊池郡大津町）では破損したカメ型土器を用いた埋葬遺構を検出した。昭和38年1月、みかん畑造成中に発見された遺構（配石遺構3、合口カメ棺1、単棺1）の中の一つである（第3図）。

破損したカメ形土器（底部を欠き、口縁周の約三分の一・第4図2）の内側を上になるようにしておき、その上に小形壺（第4図2）をのせ、その周囲を5個の自然石で囲んだ状態で出土した（第1号遺構）。石囲みは第Ⅱ層（黒褐色土）と第Ⅲ層（黄褐色土、土地では俗にミョウタンと呼ぶ緻密で固い）とにかけて作られているが、土壌がどのようになっていたのかを調査で確認することはできなかった。水の山の第3号遺構では、ほぼ水平に埋められたとみられる合口カメ棺（第5図1.3.4）と出土状態の不明な単棺を確認できた。また第4号遺構では直立した単棺（壺形土器、第5図5）の中に小型の壺（第4図1）を入れ、その両側に安山岩の板石を立てかけ、さらに板石を蓋として使用したとみられる遺構が想定できる。小型壺は第1号遺構出土のものともおそらく供献用の土器と考えられる。そのほか水の山では4個の自然石をちようど石棺の側石のように立てた配石遺構（第2号遺構）を第1号遺構と同レベルの近接したところから検出しているため、この時期の埋葬遺構の形式などを想定するうえで貴重である。

（Ⅲ） おわりに

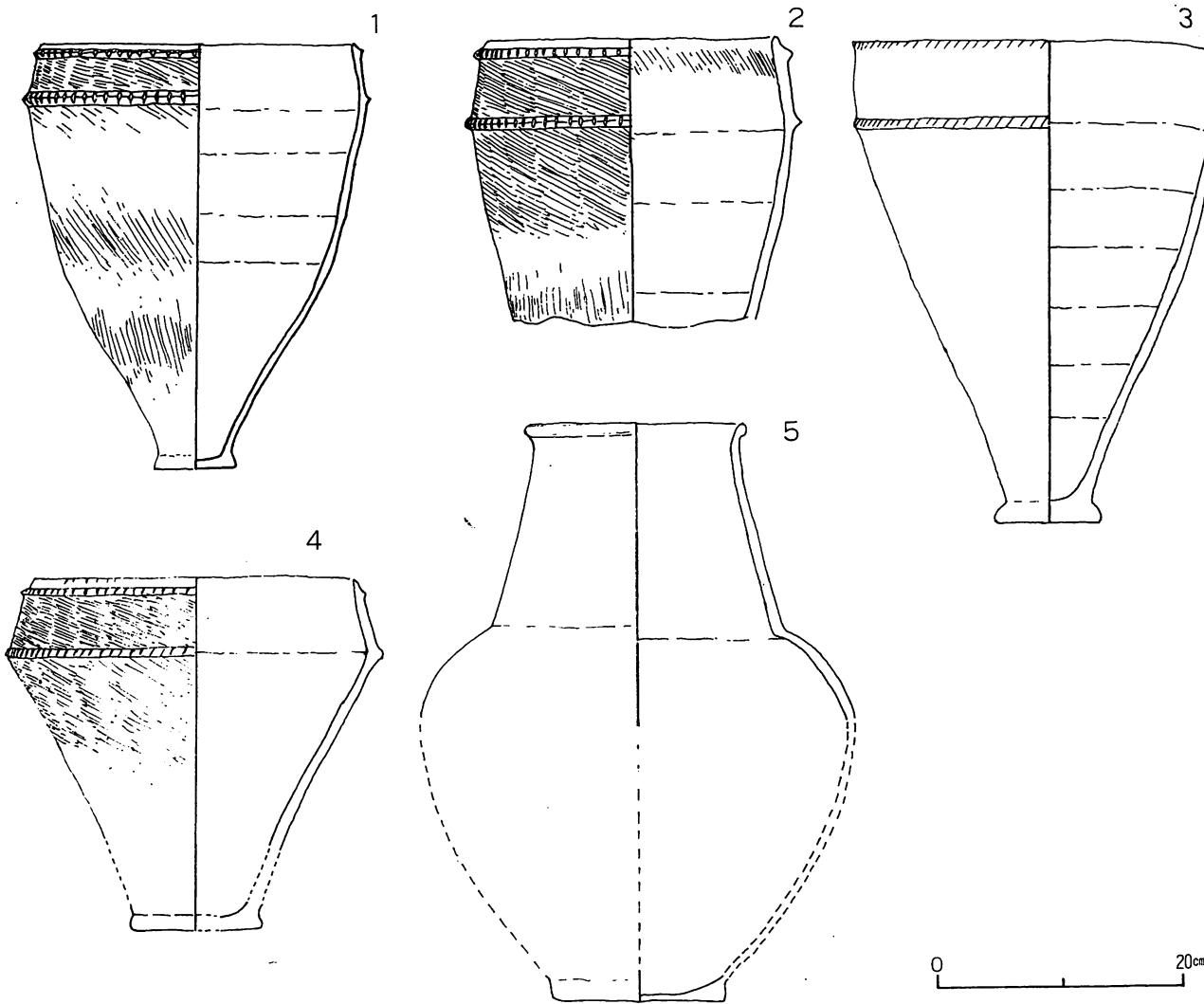
熊本県下のカメ棺についてはまだよく整理できておらず、概略を紹介するにとどまった。

ここで現状で考えられるいくつかの問題点を整理してみたい。

現在知られているカメ棺は口径30cm前後、高さ30～40cmの小形のものである。この大きさからすれば胎児か嬰兒を納めることしかできず、成人はもちろん幼児でさえも直接納めることは無理である。轟貝塚や御領貝塚ではたしかに小児の人骨を納めてあったが、そのほかは検出されたカメ棺に人骨が遺存することがきわめてまれであるので、ただちにカメ棺の大きさから小児用だと想定することはできない。ただ従来の資料から縄文後期・晩期の埋葬について、小児に対する厚葬の取扱いがなされていたことは事実であるが、西日本の弥生時代前期において収骨の例が明らか⁽⁴⁾になっていることから、後続する弥生文化との関連を考慮する必要があるだろう。

埋葬遺構について熊本県の例からすれば、縄文時代の終末期と弥生前期とではほとんど差異がないといえる⁽⁵⁾。とくに献供用の小形壺の例は、水の山のほかに弥生前期の八反田遺跡（上益城郡益城町）⁽⁶⁾、沖の貝塚⁽⁷⁾などからも検出されている。

八反田遺跡では5個の合口カメ棺が見つかった。そのうち第1号、2号、3号には板石をのせ、その板石の下に円礫を一つずつおいており、5号は板石を4枚使用して方形に組み、その上に蓋石をのせている。また第4号と5号のカメ棺内には1個ずつの小形壺（第4図3・4）を献供してお



第5図

り、水の山の例に酷似している。

沖の原貝塚では過去4次（1959、64、69、73年）にわたる調査が行われ、1次・3次調査で7体の縄文人骨が発掘され、73年の調査では新たに27体の人骨、副葬品等が検出された。第4次調査で発見された27体の人骨のうち、縄文時代後期の北久根山式土器を副葬した第22号、26号、27号と弥生時代前期の板付Ⅱ式の小形壺を副葬した第2号、14号、18号について比較する場合、それぞれの副葬の状態にはほとんど差異がない。また縄文人11体と弥生人16体との骨格の形質から比較しても、両時代人の間に明らかな差異は見られないと報告されている⁽⁸⁾。

このようなことから考えると、熊本県における縄文文化と弥生文化の比較をすれば、縄文文化の伝統が、急激な変化をおこすことなく、そのまま弥生文化にうつがれていく一面をたどることができよう。

最後に、先きにも述べたとおり、いろいろの事情で熊本県下のカメ棺あるいは埋葬遺構についてはまだ充分整理が行きとどいていないので、早急に整理して近い将来に別途紹介したいと思う。

註

- (1) 隈昭志、(1972)「熊本県成竹出土の蛇頭型土製品」、考古学雑誌57巻4号、
- (2) 九州縦貫自動車道建設に伴って県教育委員会で調査あるいは調査中の古保山(下益城郡松橋町)、塚原古墳群(同、城南町)、沈目遺跡(同町)、久保(上益城郡御船町)で検出され、古保山の遺構については熊本大学教授国分直一氏は埋葬遺構であろうとの見解を示されている。
- (3) 隈、(1964)「熊本県水の山遺跡における配石墓群の一例」、考古学雑誌50巻1号
- (4) 国分直一、(1970)「葬制の諸問題」、日本民族文化の研究所収、慶友社、
- (5) 隈、(1966)縄文晩期と弥生前期との関係—とくに墓制を中心として—、考古学研究12巻4号
- (6) 伊藤奎二、(1964)「小児葬法の系譜(砥川八反田遺跡の概報をかねて)」、熊本史学会発表要旨、伊藤氏および緒方勉氏のご教示による。
- (7) 内藤芳篤、(1973)坂田邦洋「沖ノ原遺跡の人骨」、長崎大学医学部解剖学第二教室、同報告書から関係部分を紹介すると、

Nº	性	年令	時代	埋葬姿勢	方位	備考
22	女性	熟年	縄文・後	仰臥屈葬	北東頭位	北久根山式の浅鉢1個を副葬、抜歯
26	男性	〃	〃	〃	東頭位	北久根山式の深鉢1個を副葬、外耳道骨腫
27	女性	〃	〃	〃	南東頭位	北久根山式の深鉢2個を副葬
2	女性	成年	弥生・前	〃	西頭位	板付Ⅱ式の壺1を副葬
14	男性	熟年	〃	〃	〃	〃
18	男性	(成人)	〃	〃	南東頭位	〃

文献

1. 九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査概報、(1971)同文化財調査団
2. 三万田東原調査概報、(1972)洒水町教育委員会
3. 松本雅明、富樫舛三郎、(1961)縄文式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告—考古学雑誌73—3
4. 小林久雄、(1935)肥後縄文土器編年の概要、考古学1～2
5. 城南町史、(1965)城南町、
6. 乙益重隆、坂田義広、(1959)熊本県阿蘇郡山西村布田出土の縄文式小児甕椀、考古学雑誌45—2
7. 熊本市健軍町上ノ原遺跡調査報告書(1971)熊本市教育委員会
8. 松本雅明、乙益重隆、高島忠平、伊藤奎二、(1963)熊本県竹の後遺跡について(昭和37年度西日本史学会秋季大会研究発表要旨)、九州考古学18
9. 熊本市東部地区文化財調査報告書(1973)熊本市教育委員会
10. 註7に同じ。
11. 隈、(1968)開田事業と緊急調査山鹿高校考古学部報チブサン11.
12. 隈、(1972)山鹿市鍋田西原遺跡、日本考古学報20.
13. 平岡勝昭、(1958)泉ガ丘発見の弥生式壺、熊本史学19・20.
14. 註3に同じ